

グローバル文化学環

2015 年度陸前高田実習報告会

**被災地復興における
「コミュニティ」の役割**

3 月 15 日

2015年度陸前高田実習(「地域研究実習Ⅱ」)報告会
主催:お茶の水女子大学文教育学部グローバル文化学環

被災地復興における 「コミュニティ」の役割



本プログラムは、第5回国際学生フォーラム(3月11日～20日、グローバル教育センター・グローバル人材育成推進センター主催)との合同で行われ、海外5カ国の学生も参加して実施されます。

また、3月16日・17日には、共通講義棟3号館207室にて、第5回国際学生フォーラムの一環である国際シンポジウムが行われ、海外5カ国の学生とお茶大生の発表・ディスカッションを実施しますので、合わせてご参加ください。

日時:2016年3月15日(火)
午前10時～午後5時30分
場所:お茶の水女子大学 本館306室

《プログラム》

午前:実習参加学生からの報告 司会:小川 杏子(ティーチングアシスタント)

10:00～ 開会の挨拶・趣旨説明(小林 誠:グローバル文化学環 教授)

10:10～ 実習参加学生の報告

11:50～12:10 全体討論

午後:ゲストスピーカーによる講演と討論 司会:三浦 徹(グロ文 教授)

13:30～ 開会の挨拶・趣旨説明(熊谷 圭知:グロ文 教授)

13:40～ 村上 誠二さん(陸前高田市広田町・長洞元気村事務局長)

14:30～ 休憩

14:40～ 菅野 剛さん(陸前高田市今泉地区区長)

15:20～ 荒木 奏子さん(同・にじのライブラリー現地責任者)

16:00～ コメント:佐藤 一男(米崎小学校仮設住宅自治会長)

16:20～17:30 全体討論



◇ゲスト紹介◇

村上誠二さん

広田町長洞元気村の事務局長をつとめ、女性による「なでしこ会」やゆべしづくりなど独自の取組みを展開する。

菅野剛さん

荒木奏子さん

「にじのライブラリー」の現地責任者として活動。



【参加申し込み・問い合わせ】 参加自由(午後の部のみの参加も歓迎します)
※なお学外から参加される方は、氏名・所属・連絡先を明記のうえ
下記に申込みをお願いします。 グローバル文化学環 global@cc.ocha.ac.jp

(1) 実習参加学生からの報告

お茶の水女子大学グローバル文化学環では、東日本大震災を受けて、2011年より「地域研究実習Ⅱ」として、岩手県陸前高田市における復興支援実習を行っている。国際学生フォーラムとは、ほぼ同じ歩みで進んできた活動である。国際学生フォーラムではこれと連携し、フォーラム活動の一環として実習報告会に参加させていただいてきた。

本年度は、まず実習報告会の前半プログラムとして、6月実習グループ、7月実習グループ、9月実習グループ、11月実習グループの4組の実習参加学生からの報告がなされた。

6月実習グループは、観光プロモーションによる陸前高田市の復興計画をテーマとして、特に外国人観光客にアピールできそうな地元のセールスポイントや、最も宣伝効果の高い媒体についての調査結果などを発表した。質疑応答では、震災を一種の「売り」にして観光プロモーションをする場合に注意すべき点についての問いがなされ、地元の人の気持ちを汲み取ること、過去の話よりも、土地の魅力を後世につなげていくという姿勢をもった観光促進を行うことが、あるべき方向として提示された。

7月実習グループは、長洞元気村を題材にとりあげ、仮設集落コミュニティの役割について検討した。長洞元気村では、高齢者が特産品などを作る「高齢ビジネス」が発展し、自立したコミュニティとしてやっていける基盤ができていることなどから、コミュニティとはただ住むだけの場所にとどまるべきではないという提言がなされた。また、その後国際学生フォーラムの国際シンポジウムでも大きなトピックのひとつとなった、「迷惑なボランティア/支援」の話題もとりあげられた。

9月実習グループは、キャンプ場に作られた仮設集落モビリアを対象に、「モビリティ」について考察した。モビリアにおけるうまくいっている点と課題、また、仮設住宅から本住宅に移ろうとする人々が、元々住んでいた場所に戻るのか、あるいは新しい土地に住むのかによって出てくる問題が挙げられた。

11月実習グループは、行政と生産者、生産者同士、県内と県外など、さまざまなレベルで起きる「コンフリクト」について分析した。そして、外部から復興に関わる人間として自分たちができることは、「ヒトゴト」ではなく「ジブンゴト」として防災や復興を考えることだという提言がなされた。

国際学生フォーラムの参加者たちは発言は多くなかったものの、この報告会で提示されたさまざまな問題が、続く国際シンポジウムの場で何度も話題にされるなど、大きな影響を与えられた報告会参加であったようだ。



様々な媒体の宣伝効果による 陸前高田の観光について

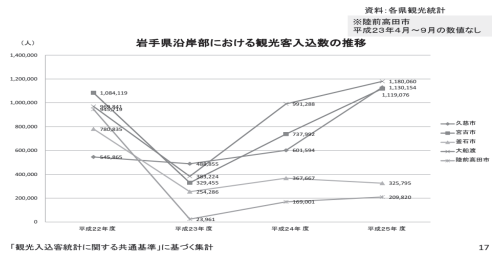
6月実習組 青木・中島・野村・児山・伊藤

2016. 3. 15

陸前高田の観光の現状、問題点

震災前は高田松原という観光資源、年間100万人
しかし、津波により壊滅

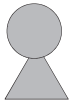
東日本大震災に係る沿岸地域等の観光客入込数の推移(岩手県)



◇震災後の需要・・・被災地見学が中心 ※語り部ガイド
しかし、残っている震災遺構は少ない(犠牲者が出た建物は
取り壊しに)
メディアでも取り上げられた「一本松」・・・それだけで観光客を
惹きつける魅力はあるのか？



◇観光協会の方のおはなし



現状の問題点は
「超・通過型」＝宿泊する観光客が少ない
しかし、新たな軸はまだ見つかっていない
教育旅行、語り部＋体験など

◇観光地という視点で見ると・・・

・陸前高田は遠い
東京から 新幹線+BRT 3～4時間
バス 7～8時間
(東京～京都 2時間)
・安くない
東京からの往復交通費
新幹線 3万円 バス 1万5000円～
(台湾や香港にも数方で行けるツアーがある)



高田松原は近隣の人を集める
観光資源だったが、
遠方から人を呼び込むには
どうしたらよいか



陸前高田の魅力(みりよく)

醤油アイスクリーム
産物



ゆたかな海
産物



美しい自然
と



温かいひとび
と



to訪日外国人ー'Rural Japan'の魅力

"I would say DO at least explore rural Japan"・・・田舎にしかない日本の魅力がある

◇外国人観光客の目的は？

from 中国、アジア・・・買い物

from ヨーロッパ・・・日本文化、休息

→「日本の田舎」の観光資源としての可能性

しかし、lonely planetで紹介されている田舎は「飛騨高山」のみ



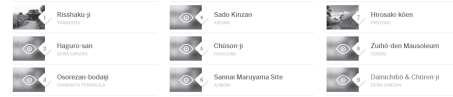
Rural Japan でヒットする情報が少ない



+

海外サイトで東北観光の情報が少ない

Sights in Northern Honshu (Tohoku)



◇飛騨市の取り組み

「何も無い田舎」に外国人観光客 飛騨高山サイクリング

2016.10.10 10:00

「何も無い田舎」に外国人観光客 飛騨高山サイクリング

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00

2016.10.10 10:00



田舎＋サイクリング というアクティビティで 5年間で40カ国以上の外国人を誘致

◇陸前高田の売り

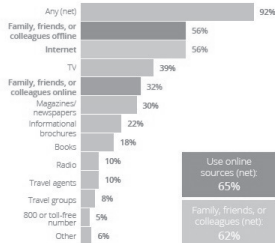
田舎 + 震災、海の幸、桜、インターネットで、先陣を切ってRural Japanとしての陸前高田の魅力を発信し外国人観光客を誘致を見込むことができる。



口コミとインターネット上の情報

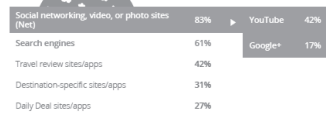
Friends/family and online sources are critical to travel inspiration

SOURCES OF INSPIRATION (LEISURE TRAVEL)



ネット上のどこで情報を得ている？

Search engines and YouTube are top online sources of inspiration



半年以内に旅行に関する動画を見た人

35%

Leisure Travelers



56%

Business Travelers

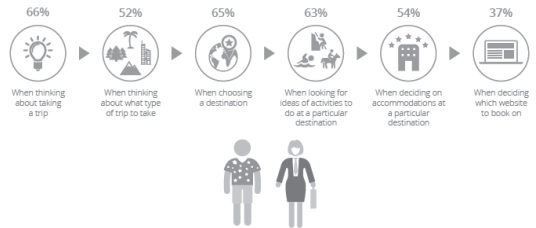


Engaged in travel-related video activities within the past six months

動画は計画が決定する前に特に見られている！

Online videos are viewed throughout the travel journey, particularly **before decisions are made**

WHEN TRAVEL VIDEOS ARE VIEWED
(Among leisure and business travelers who watched/commented on travel-related video)



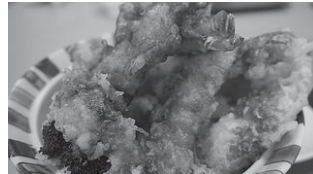
オクラホマ州の事例



テレビCMを利用していたが、YouTubeのTrueView広告に変更

- 動画は420万Viewを超える
- WEBサイトのアクセス、前年度比+485.54%に

より多くの人に



- ばばばTV
→グルメレポート
→伝統の「うごく七夕祭り」など
コンテンツ増加予定！

- ロコミの効果
→ソーシャルネットワークキングワープスだけでなく、直接話して伝える

まとめ

- 陸前高田には観光地としていかにせる魅力(みりょく)がたくさんあるが、あまり知られていない。
- 陸前高田の魅力をもっと伝えるには、テレビや旅行本(りょこうぼん)といった、大衆(たいしゅう)メディアの力を使うのが非常(ひじょう)に効果的である。
- Facebookなどを使った草の根の広報活動(こうほうかつどう)と、大衆(たいしゅう)に向けての大きな広報活動を行うことで、陸前高田が観光地としてもっと盛り上がり、復興(ふっこう)の助けとなってほしい。

「コミュニティ」で乗り越える —長洞元気村のこれまでとこれから—



7月実習
熊田小百合 岸本万里英 阪口菜月
小林咲葵 椎木ゆみ

OUTLINE

- ①長洞元気村とは
- ②震災直後の働き
- ③おばあちゃんたちの「なでしこ会」
- ④ボランティア・ビジネスとコミュニティ
- ⑤②～④のまとめ
- ⑥これからの長洞、そして私たち

①長洞元気村とは

- ◆岩手県陸前高田市広田町の長洞地区仮説住宅
...通称「長洞元気村」
- ◆長洞地区の被災者のための「仮説集落」
- ◆元気村の住民は
震災以前からつながりがあった
- ◆28戸/60戸の家屋、家財、
ほとんどの船や作業場を奪われる



②震災直後の自治体の働き

- ☆震災前からのつながり→地域力を生かした復興
- ◆無事だった家に避難/食料の提供を受ける
→集落にいたすべての人に配った
→子どもと高齢者を中心に守る
- ◆自治体の骨組み
→震災前からのコミュニティの強さ
→物資配分がスムーズに



②震災直後の自治体の働き

- ◆長洞元気学校の設立
→被災後すぐに再開
- ◆「笑顔集まる土曜日」
→売上は自治体の資金に
→安否確認の役割も
- ◆仮説住宅への移転
→被災前の家の並びで
=コミュニティの維持



③なでしこ会とは

- ・長洞地区の高齢女性12名による組織(強制力×)
- ・「仕事が無く無気力に過ごしているおばあちゃんたち
で何かできないか」→「ゆべし」作りから活動をスタート
- ・「好齡ビジネス(=年齢に見合った範囲のビジネス)」
を展開

なでしこ会メンバーによるお話

震災前から月1回お茶等をするグループ(年代ごと)はあったが、関わりは震災後のほうが大きい

→「集まることで、感情を共有し、笑って過ごすことができる。プラス思考になれる。」

...では、男性は？

村上さん(元気村リーダー)によるお話

「女性たちが生き生きと活動している一方、
男性たちはひきこもりがち」

→灯籠づくりの作成を依頼し、外に出てきてもらう

考察①

都市コミュニティと比べて、なでしこ会は非常に結束が強いコミュニティである

...・震災以前から、集まるような関係性が出来ていた
・集まり、感情を共有することへのニーズがある

考察②

「作業すること」はコミュニティを形成するインセンティブになりうる

Ex.ゆべし作り、灯籠づくり

私たちのコミュニティへの応用(分析)

もともと人付き合いが少ない都市部で、なでしこ会(そして長洞元気村)ほどの結束力を持ったコミュニティをつくるのは困難

...しかし、東日本大震災後、「コミュニティの力が弱いことへの危機意識」は私たちのコミュニティでも共有されつつあるはずだ。
→コミュニティ形成・強化へのニーズがあるのでは？

④ ボランティアビジネスとコミュニティ

・ Volunteer(ボランティア)とは・・・
志願者、奉仕者、自ら進んで社会事業に無償で参加する人(広辞苑第六版より)

1. 自らの属する地域をより発展、改善するために地域内で活動する

2. 他の場所で支援が必要と思われるところに足を選び活動する

④ボランティアビジネスとコミュニティ

1.に関して・・・

より住みやすい地域をつくるための活動

Ex. ボランティアのビジネス化

→ ボランティア活動や聞き取りを依頼する団体にお金を払ってもらうシステム

2.に関して・・・

他のコミュニティ支援のための活動

しかし、トラブルが起こることも・・・

Ex. 迷惑な炊き出し

助かる支援、迷惑な支援の違いは何か

④ボランティアビジネスとコミュニティ

★コミュニティのルールの遵守

あくまでコミュニティの中に混ぜてもらっているという立場

★相手のコミュニティが求めるニーズに見あった活動

タイミングと需要を把握する

調査

発信

ボランティアとは・・・

・自発的に活動を希望し、目的を持って他のコミュニティに介入していく

・相手が現在どういった支援を求めていると考えられ、その中で自分達のコミュニティが出来ることは何なのか

⑤長洞コミュニティを形作る要因

①震災以前～震災直後の自治体のはたらき

②高齢者の活躍の場(なでしこ会、好齢ビジネス)

③ボランティアビジネス

↓

ビジネスの基盤、生活の場・・・

住民にとって欠かせない場所でありながら

それを利用した活躍の場にもなっている

⑥これからの長洞、そして私たち

①長洞が現在のコミュニティを形成した流れ

②好齢ビジネス(なでしこ会)

③ボランティアビジネス

←積極的に自立したコミュニティの働き、その効果

ゆべし作り、荳わかめなど特産品もさかんに

これからの長洞は??
私たちのコミュニティとは??

⑥これからの長洞、そして私たち

・コミュニティを活かした活動で順調に見える長洞であるが・・・

「いつまで自分たちは被災者でいるのだろうか」

→被災地としてのまなざしではなく、魅力ある町として長洞を創りあげていくため

だから・・・

「この長洞で何が出来るだろうか」

コミュニティの地盤を活かした地域活性化

⑥これからの長洞、そして私たち

私たちの生きるコミュニティを考える

誰もが何らかのコミュニティに所属しており、それぞれのコミュニティも複雑に絡んでいるはず ex. サークル、クラブ、地域活動

・長洞の事例が必ずしも参考になるわけではない

しかし、そこには「コミュニティ」という学びがある

・さまざまな事例に触れ、自分たちのコミュニティを見つめなおすこと

その契機を与えてくれた事例である

陸前高田実習報告会

～震災直後から現在の避難所・仮設住宅の生活とそのコミュニティー～

地域研究実習Ⅱ 2016年3月15日

9月実習組

志田 沙央理

須之内 萌

宮崎 真帆

名取 幸花

菅花 沙也佳

はじめに…

「震災復興とコミュニティー」をテーマに、米崎小学校の仮設住宅、モリビアに訪問。そこから、過去・現在・これからの仮設住宅、コミュニティーのあり方に興味をもったことがきっかけで、今回のテーマを選択した。



～内容～

1・過去

震災直後の避難所～仮設住宅への移動とそのコミュニティー

2・現在

9月実習のときの仮設住宅とコミュニティー～現在

3・これから

今後の課題とこれから

避難所生活 ～震災直後～



避難所とは

米崎小学校体育館

- ・米崎中学校の体育館から約200人以上が移動
- 避難所生活の始まり
- ・避難した人がみな自分から仕事をする
- ・佐藤さんが各分野のリーダーを集め、運営役員を決定

乳幼児のための部屋

・離乳食、夜泣き、世話などにより
まわりと同じことができない・・・本人・周囲もストレス

↓
・小学校の教室を1つ借り、乳幼児・子育て世代同士のための部屋にミルクやオムツをみんなで分け合って使う
→穏やかで平和な空間

心がけたこと

- ・物資は見えるところにおく
- ・公平性を意識したルール

役員が最初に物資をとらない
決まったことの説明は全員がそろったときに（物資配布の時間など）
持ち物による強弱を作らない（携帯電話の充電器を全て回収）

仮設住宅への移動と コミュニティー

かせつ じゅうたく 仮設住宅とは

自分の家が災害でなくなってしまった人に、国や市町村が貸す一時的な家のこと

（自分では新しい家を建てることができない人が対象）

公園や学校の校庭、空き地に作られるので、もともと住んでいた場所から遠く離れることも多い

壁はベニヤ板などで作られ、隣の家との距離も近くプライバシーを持ちにくい



ベニヤ板→



東日本大震災における仮設

- ・震災の後、建設が始まり早い地域で4月、遅いと6月に入居が始まった
- ・最初は数が足りず抽選により住む人を決めた
- ・陸前高田市は、アンケートで希望の仮設住宅を調べた
- ・米崎小学校では4月27日に住みたい人に説明会を開いた

抽選によるコミュニティーの変化

- ・避難所の中で格差が生まれる
（当選した家庭、落選した家庭・・・）



震災直後は一致団結していても、当落により互いに居心地の悪い思いをするように

仮設住宅移動における課題

- 建設の早期化
- 抽選の優先度を明らかにする（優先家庭をどうするか）
- 震災前のコミュニティの継続と、新入居者を除外しないための工夫
（集会所をつくる、イベント、近くの家の人に声を掛け合うなど）

9月実習時の 仮設住宅とコミュニティ

訪問時(9月)の仮設とコミュニティ

この時期の仮設は...



高台移転を控えた時期
→だんだん人が少なくなる

訪問時(9月)の仮設とコミュニティ

実際に住む方の話①



仮設:壁が薄い、狭い

コミュニティ:ストレスは少なめ
今後の不安

訪問時(9月)の仮設とコミュニティ

実際に住む方の話②

清水健太さん(ばばばTV)

進路に悩み東京から陸前高田へ

→温かく迎える人が多い
→おたがいに与えあう関係



訪問時(9月)の仮設とコミュニティ

サンマ祭り前日・準備

チラシ配り→声をかけても出てこない人も多い



家に上がらせてもらって準備
→フレンドリーな方もいる

訪問時(9月)の仮設とコミュニティ

サンマ祭りの日



高齢者・子供は多い
若者少ない



訪問時(9月)の仮設とコミュニティ

片付け・佐藤さんのお話

佐藤さんの指示で余ったサンマを全員の家に配る

- コミュニティ維持のための努力?
- 簡単ではない
- 気配りと努力が必要

訪問時(9月)の仮設とコミュニティ

まとめ

- * 仮設住宅として変わる時期
- * 仮設独自のコミュニティ→大切に思う人も
- * コミュニティ維持にはそれなりの努力が必要
- * 今後のコミュニティ形成はさらに重要

現在

～9月実習後の状況～

現在の状況

現在は...

仮設住宅に暮らす人、住宅再建やその他の土地に定住する人など様々な動きが見られる



○仮設住宅○

- ・災害公営住宅の整備や区画整理事業に時間かかる
- みなし仮設を含む、仮設住宅の供与期間が延長
- そのまま残る人も... (陸前高田市を含んだ7市町村)

<米崎小学校仮設住宅>

新年会、ラジオ体操なども行われる
52世帯、約100人の方が今も暮らしている



仮設住宅の解体については...

みやぎけんいわぬまし
宮城県岩沼市
入居5年の期限となる4月28日までに全て退去
➡5月仮設住宅解体に着手。(県内は初めて)



災害公営住宅の現状

- ・孤独死問題
- ・空き室→防犯・コミュニティ形成へ支障

課題は...
時とともに変化するニーズをとらえ続ける

今の問題

- ・仮設住宅の老朽化(古くなること)
 - ・コミュニティの変化
- 仮設住宅から引っ越す人、残る人
- ・新たな住宅での居場所づくり
(公営住宅も知らない人同士が集まることもある)

これから
～今後の課題とこれから～

今後の課題

- * 高台移転後の生活
- ・プライバシーが守られた生活
⇨おたがいの様子が分かりにくい
仮設での生活にはなかった孤独さを感じることも
- ・仮設住宅に残る人々のコミュニティ
- ・震災前・仮設・今後、それぞれのコミュニティ

課題はあるものの...

- ・新しいまちづくりの動きも...
復興コンパクトシティ(宮城県安川町・山元町)
→学校やスーパーなど、様々な機能を集約したまち
まちづくりの会議には住民も参加

少子高齢化問題への対策
コミュニティ強化、地域が一体化
有縁社会
Uターンをする人も増える

※新しいまちづくり、新たなまちとして
注目される可能性！忘れかけていた大切なことを思い出すまちに！

せいちょう

ご清聴

ありがとうございました！！

陸前高田をめぐるコンフリクト

—陸前高田の中で、中と外をつなぐ人として—

11月実行グループ
長尾悠里 池田至織 寺塚沙織 深澤要馬
藤井理緒 三浦詩歩 望月梨帆

目次

- ①はじめに
- ②陸前高田の中のコンフリクト
住民の間で・行政と生産者の間で・行政と住民の間で...
- ③陸前高田に行ったわたしたちのコンフリクト
陸前高田の防災活動を見て、わたしたちにはなにができるのか
- ④まとめ



①はじめに

- ▶ 陸前高田に行く前まで...
—陸前高田=「被災地」、陸前高田の人=「被災者」
みんなで力を合わせて復興に向かっている
- ▶ しかし、陸前高田に行ってお話を聞くと...
—「被災者」の中でも、立場の違い・考え方の違い
(陸前高田の中のコンフリクト)
それでも、「復興・防災」への取り組みははじまっている
—陸前高田に行ったわたしたちは、なにをするべきなのか
(中と外をつなぐ人としてのコンフリクト)

②-1 住民の間のコンフリクト

震災から五年...

- 【自に見えて現れてきた「差」】
- ・自宅or仮設住宅
- ・仮設住宅→自宅再建
→公営住宅
- ・様々な「差」

②-1 住民の間のコンフリクト

- 【1. 自宅 or 仮設住宅】
- ・自宅が残った人
→安心感
- ・自宅が壊されて仮設住宅に入った人
→家がなくても、生まれ育ったその場所、土地に願い入れ
- ※本当の「我が家」の存在の認知が不安や求償をもたらす
- 宅地と農地の交換という新たな一歩に踏み出せない

②-1 住民の間のコンフリクト

- 【2. 仮設住宅を出て...】
- ▶ 仮設住宅の期限が迫る
→その後の住まいに明らかな「差」
- 公営住宅へ
→新たなコミュニティづくりの不安
本当は「家」がほしかった...
- 自宅の再建
→「我が家」の獲得
安心感

②-1 住民の間のコンフリクト

- 【3. 様々な「差」】
- ・仮設住宅内部での「差」
 - 仮設内の設備
 - ・震災当時の状況の「差」
 - 生⇄死
 - 自宅⇄仮設住宅
 - ・市長と行政
 - ・岩手県内
 - ・岩手県外

②-1 住民の間のコンフリクト

しかし...

▶ そういった「差」を抱えながらも支えあう人々

→やっと被災者と在宅者の間で話ができるように

→0から始まるのが自分たちだけじゃないと思えば頑張れた

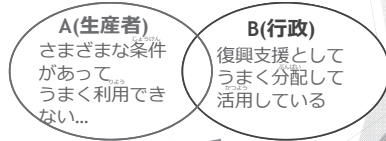
②-2 行政と生産者のコンフリクト

わたしたちが気づいた問題 → 復興への意識の違い

	A(生産者)	B(行政)	C(生産者)
どれくらい復興できた？	△	○	△
陸前高田は資源豊富？	○	○	○
もっと人が来て欲しい？	○	○	○

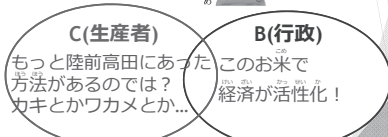
②-2 行政と生産者のコンフリクト

具体例1：復興支援金



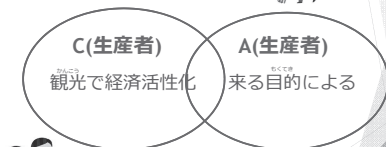
②-2 行政と生産者のコンフリクト

具体例2：たかたのゆめ



②-2 行政と生産者のコンフリクト

具体例3：交流人口について



②-3 行政と住民のコンフリクト

▶ 行政・市民の対立

- ▶ 復興
 - ・集団移転
 - ・予算の割り振り
- ▶ 防災
 - ・まちづくり
 - ・防波堤

②-3 行政と住民のコンフリクト

- ▶ 集団移転
 - 住民側の主張
 - ・工事費—政府が負担
 - ・土地—個人で買う（地価が高い）
 - ・しかたがなく公営住宅に入る—時間がかかる
 - 行政の対応
 - ・住民に説明する場を設ける
 - すべての意見を反映することはできない

②-3 行政と住民のコンフリクト

▶ 予算の割り振り

- 住民側の意見
 - ・多くの予算が割り当てられるものの、使い道が指定されている
 - ・予算案とニーズが一致していない
 - ・政府と地元住民の意思疎通に時間がかかる

②-3 行政と住民のコンフリクト

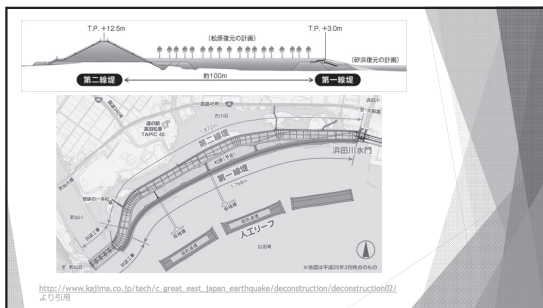
▶ まちづくり

- 行政の主張
 - 災害に強いまちづくりを進めていく
 - <ハード面>
 - ・防波堤建設
 - ・逃げやすいまちづくり（道の確保）
 - <ソフト面>
 - ・災害時に逃げる意識を育てる（防災教育）

②-3 行政と住民のコンフリクト

▶ 防波堤

- 住民側の意見
 - ・防波堤もいずれ壊れるもの
 - ・海が見えなくなったことで逆に怖い
- 行政の主張
 - ・災害に強いまちづくりの一環
 - ・景観より防災



②-3 行政と住民のコンフリクト

▶ 被災地でのコンフリクト—考察—

- ・ 陸前高田に残る人たちの想いは同じ
- ・ 陸前高田を復興させたい、同じ悲しみを繰り返したくない
- ・ 一方、それぞれが福く復興、防災のビジョンが異なる
- それぞれがもつ理想に向かっていった結果、コンフリクトが生まれる

↓
一見すると一丸となっているようだが、実はそうではない

②-3 行政と住民のコンフリクト

- 被災地の中でも復興・防災のビジョンはさまざま
- ・ それぞれに長所と短所がある
 - ・ 正解が出る問題ではない

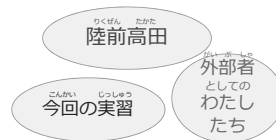
↓
外部者のわたしたちができることで、
確実に被災地のためになることはなにか？

③-1 陸前高田の防災活動

防災をめぐるコンフリクト

- ▶ 津波の記憶を後世に残したい（桜ライン3.11）
⇔ 復興の妨げになる（行政）
- ▶ 伝わらない被災の意識
体験した人⇔体験していない人

③-2 わたしたちにできること



これからどう関わっていくのか？
実習をどう生かすのか？

③-2 わたしたちにできること

1. 再び訪れる

- ▶ 人に会い、交流の輪を広げ、続けていくこと
- ▶ 現地を自分の目で繰り返し見ること

⇒自分ごとに考えるきっかけになる

③-2 わたしたちにできること

2. 陸前高田の現在の様子を伝える

- ▶ 自分の言葉で見たこと、思ったことを話すこと
- ▶ 自分の知っている人が話しているということ

⇒テレビやネットのような画面越し、ではない生きた言葉として人に届くのでは

③-2 わたしたちにできること

3. 災害時のシミュレーション

- ▶ 「自分たちと同じ過ちをおかしてほしくない」
- ▶ 防災訓練
- ▶ 普段の持ち物
- ▶ 家族との連絡手段
- ▶ もしう起きたら自分はどう行動するのか？

③-2 わたしたちにできること

4. 自分の地域を大切にすること

- ▶ 自分が内部直である場所を大事にする
 - ▶ 地域、生活、家族、人生を見直すこと
- ⇒ 震災の経験を生かす

④まとめ

- ・ ヒトゴトとして考えるのではなく、ジブンゴトとして考える。
- ・ 自分のコミュニティを考える。
- ・ 陸前高田で直接聞いた、生きた言葉を伝える。

④まとめ

- ▶ ヒトゴトとして考えるのではなく、ジブンゴトとして考える。
 - ・ 3.11は自分にもじゅうぶんありえること。
 - ・ 自分だったらどうごく？ を想定する。
 - ・ 被災したのが、自分の家族だったら？ 友人だったら？ 恋人だったら？
- ⇒ どれだけ身近に考えられるかがカギとなる。

④まとめ

- ▶ 自分のコミュニティを考える。
 - ・ ジブンゴトにも通じるが、今のコミュニティでも被災したら... を考える
⇒ より具体的に
 - ・ 考えることで足りないものや、もしもの手立てを想定し、準備することができる。
- ⇒ まずは全員自分の身は自分で守る。

④まとめ

- ▶ 陸前高田で直接聞いた、生きた言葉を伝える。
 - ・ これは現地に行ったわたしたちだから出来ること。
 - ・ 伝達される人はよりリアルに想像できる
- ⇒ リアルさを伝達できるのは、実際にその地に訪れた外部者。

(2) ゲストスピーカーによる講演

～～コメント・佐藤一男氏（米崎小学校仮設住宅自治会長）～～



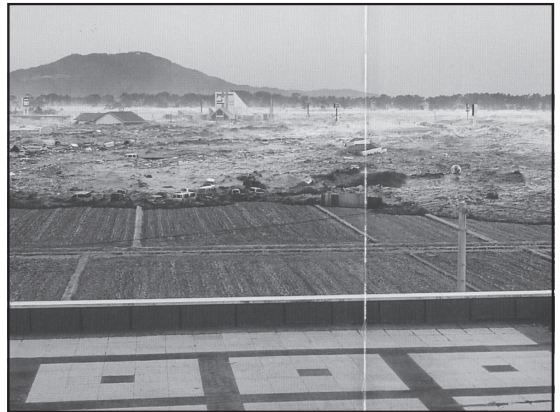
実習参加学生たちの報告を受けて、佐藤一男氏からは、陸前高田市は震災前にはほとんど知る者のない土地だったのに、現在は注目をあびて特産品などがよく売れるようになっており、一部だが経済が潤っていること、だがそのような、いわば無料の広報をしてもらったために、地元の人々はお金をかけて特産品、観光等の広報をする価値がわかっておら

ず、情報発信が下手であることを指摘した。そして、外の地域へ出て行こうとせず、ずっと地元から出ない人々が多い地域でもあるため、自分たちの郷里の良さを客観視してアピールすることが不得手なので、実習参加学生たちのように外部の人たちの方が有用な意見を出していけるという考えを述べられた。

～～趣旨説明・熊谷圭知教授（お茶の水女子大学）～～

実習報告会の後半プログラムの冒頭に、グローバル文化学環・熊谷圭知教授から、趣旨説明として、陸前高田実習の背景が説明された。2011年の実習開始当初は、現地に行っても宿も食事する場所もないような状態で、いかに安全に実習を遂行するかが最大の問題だったこと、また地元のオバサンたちはよく話を聞かせてくれるのだが、男性たちが家にひきこもって話をしてくれないのが苦勞の種だったことなどが語られた。その後5年間、聞き取り調査では極力こちらからの質問はせず、相手の言いたいことを話してもらおうというスタンスで、活動を続けてきた。5年を経た現在では、一口に「被災者」といっても多様な人がおり、一概にまとめて扱えないことなどが見えてくるとともに、地元の方々とそれなりの近いお付き合いができるようになってきている。しかし今まで聞いたことというのは、事実のほんの一部に過ぎない。今後は、聞けなかったことは何なのかを考えていく段階にあると述べた。









ライフラインは途絶え
 広田半島は孤立



津波てんでんこ
 想定に囚われるな
 最善を尽くせ
 率先避難者たれ



被災者の多くは
 家族の安否確認に動く



生きてただけでよかった

生存確認数 22,018人/24,246人
 被災世帯数 3,159戸/7,700戸
 2011.11月現在

一人では
 生きてゆけない
 の希望

長洞部落会の動き

夏雲や
 生き残るとは
 生きること(俳句 甲子園)

「こんなときだから、お話を聞きたい」と話してくれた前川さん(左)。お話を聞いた後、インターネットなどを利用して、積極的に情報発信をしている

- 1 安否確認 (confirmation of someone's safety)
 行方不明者の確認
- 2、食料の確保 (Securing of food)
 備蓄米の調査・おにぎり配給
- 3、宿泊所(避難所)の確保 (Securing of refuge)
 民家に分宿避難



長洞集落の取り組み

リーダーシップとガマン(役員会による管理統制)

- ・ 食料確保
- ・ 避難所(分宿避難)確保
- ・ 集落民の安否確認
- ・ 医薬品の調達
- ・ 治安維持活動
- ・ 必需品の買い出し
- ・ 燃料の確保
- ・ 被災者名簿の作成
- ・ 風呂大作戦の実施
- ・ 元気学校設立
- ・ 仮設住宅用地の確保
- ・ 市への陳情・要望書提出
- ・ 杜の整備作業
- ・ 支援物資の配給

地域住民が「学校」開校

**学
ら
び
の
声**

笑顔戻り活気あふれる

長洞元気学校の立ち上げ3/23

国があなたのために何をしてくれるのかを問うのではない。
あなたが国のために何ができるかを問うてほしい。

2011/3/30記事

子どもたちの元気な姿や声は
地域全体に元気をまくる

長洞集落の受け止め方

- 1、子どもたちの元気な姿を見に来るばあちゃん、長洞にこんなに子供が居たんだ、驚き喜ぶ声。
- 2、つながった命がまだまだつながってゆく形がそこにある、子どもたちの姿の中に輝かしい未来が見えてくる。



要旨

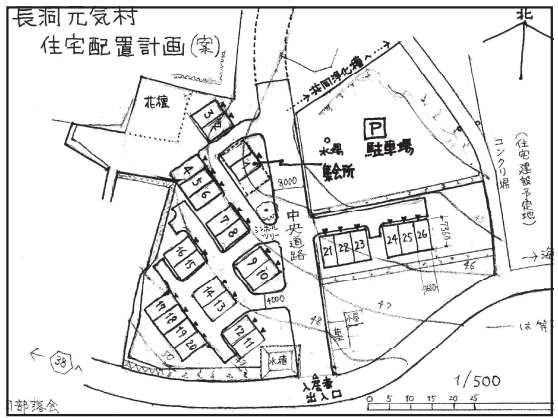
長洞地区は、地域コミュニティを育む
から地区民一丸となって復興に向けた
活動を断念しなかった。
応急仮設住宅の申請に際し、自治
体より申請した上で、申請書に
必要に応じて建設予定地を特定し
、申請書に無償提供の同意を得た。
長洞地区は、応急仮設住宅の建設を
入居申請書に添えて、希望していた。

平成23年3月9日
長洞部落会長
前川 勇一
(丸田町字長洞146番地)
TEL 56-2353

集落内に仮設住宅を建てたい

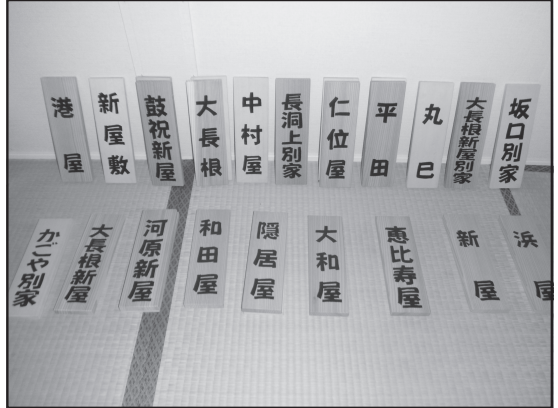
- 1, 地権者の同意
4人の地権者に無償提供の協力要請
- 2, 入居希望者への説得
長洞地区仮設住宅への入居申し込みのとりまとめ
- 3, 集落としての総意
全員集会以での確認

※NHKニュース深読みの取材・放送4/2



平成23年5月4日
陸前高田市長 宇羽 大様
丸田町長 前川 勇一
TEL 090-9743-8816

毎日の取り組みご活躍は、心から感謝
申し上げます。本町、町民の皆様から
、丸田町長、長洞地区応急仮設住宅の
配置計画について被災者地区民と
、被災者街地研究会の協力を、長洞部落
会、総意で、丸田町長、復興の式に
、丸田町長、陸前高田市長、復興の式に
、丸田町長、陸前高田市長、復興の式に
、丸田町長、陸前高田市長、復興の式に





笑顔の集まる土曜日



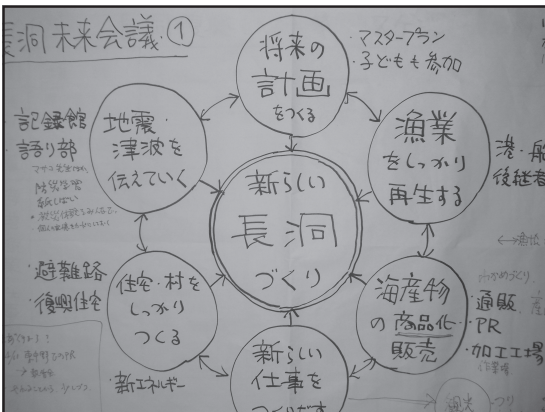
IT革命と「舩もやい」



ハーバードビジネススクール
・サインはVプロジェクト
・水木団子づくり

2013.1.17

好節ビジネス
・ローカルビジネス
・コミュニティビジネス
・高齢者の生きがい
〈持続可能な収入確保〉





被災地体験ツアーの受け入れ

6人以上 1~2時間 1人料金

- ・ 語り部による被災地案内 1000円
- ・ 地域リーダーの話 1000円
- ・ 昼食交流会 1500円
- ・ ゆべしづくり体験 2000円
- ・ 漁業体験 1500円
- ・ 農業体験 1000円
- ・ ボランティア活動 500円

長洞元気村支援会員募集 長洞の特産品を年4回発送



- ・ 春号
しゃぶしゃぶワカメ
スルメの一夜干し・塩さけ・干しまごも
- ・ 夏号
生ウニ
サイダー・塩蔵ワカメ・ジュース
- ・ 秋号
活ホタテ
日本酒・鮎・ピクルス・ゆべし
- ・ 冬号
活アワビ
米崎りんご・ゆべし

かわいい子には旅をさせよ

明治学院大学







高齢者と子どもの
笑顔のあるまち長洞

菅野 剛氏（陸前高田市今泉地区区長）



菅野氏の講演は、行政など外部の人間による、地元での実情への理解不足が、いかにフラストレーションを引き起こすかという話題を中心に進められた。

自宅に週何日以上住むこと、という罹災証明を出すための書面上の規則にこだわるお役所のやり方は、出稼ぎが多い人などに不利な状況を作り出している。

また、コミュニティの復興についても、「町」は急には作れず、小さな村から育てていくべきものなのに、外から来た「専門家」はいきなり集住させようとする。これは住んでいる人々の気持ちがわからない行為である。

ただ自分の説を押し付けに来るような学者もおり、そういう人たちには「自分がここに住む気がないなら帰れ」と言う。

地元の人々が避難してきていた場所に、「指定された避難所ではない」という理由で、警察が追い出しに来たこともあった。「そちらこそ不法侵入だ」とやり返した。

最近では、公務員はとにかく責任をとりたがらないから、相手の責任にならないような形でさまざまな交渉を進めればうまくいく、などのノウハウも身につけてきた。

コミュニティの復興は、まず皆が自分で動かないと実現しないものであり、そのような賢い交渉をしながら、自ら道を切り開いていくしかないと結んだ。

質疑応答では、今泉地区の人々は、仕事がなければ自分で仕事を作れ、というような、非常に積極的かつ地元を誇りをもっているが、それは震災後からのことなのかという質問が出た。それに対し、震災前からそのような気風はあり、たとえば子供たちが以前に、地元に入ってこようとする開発業者と土地出身の反対派が対峙するというストーリーのオリジナルの劇を作ったことなどもあって、自分の力で郷里を守らなくてははいけないという意識は子供からしてもっていたという答えがなされた。

また、東京からの支援はどういうものを望むか、それとももう支援は必要ないのか、という問いに対しては、今は自分たちの力で土地を建て直すことが最重要事なので、そちら方面に関する支援は不要だという答えだった。行動をとまなわない「勉強会」等も、一切行うことはないという。

荒木 奏子氏（陸前高田市にじのライブラリー現地責任者）



神社持ちの神主さんの娘だという荒木氏は、神社は前向きパワーの源であり、これからがんばろうという決意を表せる場所であるとともに、これまでの来し方に感謝を表す場でもあるという話題から講演を始められた。

神主の父親は常々、「祭りは究極の避難訓練だ」と言っていたという。すなわち、祭りには明確な指揮系統や役割分担があり、有事の場

合に動くための予行演習に最適である。また、地域の老若男女がすべて集まるので、皆の顔の確認や、今どういう状態であるかというコミュニケーションもできる。実際に東日本大震災の際には、救援者がそうして地元の人たちの暮らしぶりを理解していたおかげで、寝たきりの老人がいる家庭などがわかり、ピンポイントで救出できた。

神道の考え方の根本にもあるように、日本人が2000年以上も培ってきた考え方は、「自然は奪いもするが、恵みも与えてくれる。だから人間が自然をコントロールすべきではない」というものである。しかし震災後の復興活動では、自然をコントロールしようとする方向性を感じられる。それは日本人の生き方には合わないということが、ようやく最近認識されてきたように思う。

陸前高田市は、平穏時に政治を遠いものとして真剣に向き合わなかったツケで、震災後に地元をよくわかっていない外部の人に大量入り込まれる事態を招いてしまった。政治というのは生活に問題がない時には遠いものだが、何か問題が起きるや否応なく関わってくるものである。しかしその反省から、現在は子供であっても、年齢に応じた貢献をして、皆で町づくりをしていこうという気運が高まっているのは、良かったかもしれない。

にじのライブラリーは、東京の出版界からの援助で送られた本を置いている。市の図書館が本の受け取りを拒否してきたので、せつかくの援助を無にしないために管理のための場所を作った。30坪くらいの広さの図書館を、人手薄のため一人で回している。周辺にあまり人家がない場所だが、市内の人がお茶を飲みに来るなど、地元の憩いの場となっている。手芸サークルの作品展などの会場としても使い、3日間で300名の来場者があったこともある。今泉地区は震災で壊滅してしまったが、土地に愛着があり戻りたい人は多いので、そういう人たちが集える場所として機能しているのかもしれない。

(3) 討論

実習報告会最後の討論では、国際学生フォーラムに参加している海外学生全員に、一言ずつの質問ないしコメントの機会が与えられ、ゲストスピーカーの皆さんからご返答をいただくことができた。



クリスティーナ・メトリコヴァーさんからの、宗教と災害に関する質問に対しては、「祭りとは、みんなで頑張るための基盤作り」というお答えが得られた。祭りなどの活動を通して、情報を共有、確認していくことが、コミュニティの役割である。ただそうしたコミュニティ活動には、「ばーちゃん」は元気に出てきても、「じーちゃん」はなかなか出てこないという問題がある。男性

性はかなり年配になっても仕事をもっている方が多いので、時間がないということもあるが、時間がないなりに男性でも果たせるような役割をもたせれば、もっとコミュニティに参加してもらえるのではという提言もあった。

キム・ファジンさんからは、韓国には、今回の実習発表会で話題になっていたようなコミュニティはなく、作っても長続きしないという状況が説明されたうえで、震災後のコミュニティの復興において大変だったことは何か、また震災でむしろ良くなった点があるかという質問が出された。これに対して、菅野さんからは、復興活動は実際、大変というより楽しかった、別にコミュニティを復興させようという意識もなく、自分がここに



あることへの先祖への感謝と、互いを思いやる気持ちをもって人と共に生きていけば、それが自然にコミュニティになるのだというお答えがあった。震災で良かったことは、以前使っていた化学肥料が農地に蓄積していたのが、津波ですべて流されてくれたので、本当の有機農業が始められたことで、「津波さんありがとう」といつも言っている。荒木さん



は、津波のおかげで、それまで縁もゆかりもなかった人たちが大勢支援に来てくれたことを挙げ、津波で物的財産は流されても、もっと重要な、人の縁という財産を得られたと述べた。

ユン・ジソンさんからはまず、講演を聞いて被災地の実情がよくわかったことへのお礼が述べられ、



そしてどんな支援を受けたかについて質問があった。菅野さんから、農業・漁業という「作る」仕事をしている人間は立ち直りやすく、そんなに支援も必要ないが、農業を再開するにあたり、撒く種がなかったのもそれだけは支援を受けたというお答えがあった。続いてユンさんから、とても聞きにくいことだがという前置き付きで、被災地の海産物などを

食べると被爆するという噂が海外に広まっているが、それについてどう思われるかという問いがあった。これに対して、安全の基準などはわからない、現時点では、とにかく自分や家族には何の異常も出ていないとしか言えないが、確かに、被爆で一番怖いのは遺伝子破壊であり、その有無はずっと先にならないとわからない、すなわち、確かなことは何も言えないという意見が述べられた。ただ、そうした噂が独り歩きするせいで地元の人々が受ける精神的ダメージは大きく、それはぜひ汲み取ってほしいという。

アンソニー・チャンさんからは、グローバル・シチズンとして、海外からも被災地復興のために何かできないかという質問が出た。これに対して村上さんから、津波や地震そのものは天災だが、そのあとに起こる諸々の問題はほとんど人災である、そうした人災がなるべく起きないように、助け合うことが大事だという意見が出された。また佐藤さんからは、たとえ地震が起きても、それで誰も死ななければ、それは「災害」にはならない。天災が災害にならない道は何か、ぜひ勉強してほしいという要望があった。



キャンプアン・ナッタゴンさんからは、コミュニティの復興とは心の復興なのだということが、お話を聞いてよくわかったというコメントがあった。

チン・ネイさんからは、長洞元気村のお話が一番心に残った、災害からの回復の早さに感動したという感想が述べられた。



チョウ・レイレイさんは、「祭り」はとてもいいと思うし、前向きな信念をもつことはそれ自身が宗教だと思うという意見を述べたうえで、復興イベントに参加すると却ってつらい思い出がよみがえってしまうなどの理由で、参加したくない人も中にはいると思うが、どのように対応していくのかという質問があった。菅野さんから、マスコミが煽って、震災についてはいまだに「あの時はつらかった」というような過去の話ばかりが蒸し返され、子供にもそのようなテーマの作文を書かせたりするのは、前へ進んで行こうとしている被災地の人たちを邪魔する行為であり、よくないと思っている、過去ではなく未来を見るイベントであれば、チョウさんの言うような理由で参加したがない人は、出ないのではないかと意見が述べられた。



リュウ・ギョウエイさんは、長洞元気村の年配女性の生産グループである「なでしこ会」はとてもいいと思うと述べたのち、自分たちが住む大連でも津波の危険があるので、災害に備えた学生連合を作ろうと思っているが、その際に注意すべき点などのアドバイスをお願いした。これについては佐藤さんから、大事なのは学生連合を立ち上げた当初の目的をいつまでも見失わないことである。グループが大きくなってい

けば、どうしても政治や金銭の問題にかかわらざるをえなくなり、おかしな方向に行ってしまうがちなので、グループが大きくなっても本来の目的を全員が共有し続けるよう努めるべき、という助言があった。



本実習報告会は、国際学生フォーラムの学生たちもそれぞれに得るところがあり、考えを新たにできた、貴重な機会であったと思う。